古野妙蓮寺と陰陽道・陰陽師

二宮修二

はじめに

由布市挾間町古野には、今、無住となっている寺院「青雲山妙蓮寺」がある。

妙蓮寺については、江戸時代府内藩の「雉城雑誌」には次のように書かれている。

「慶雲山妙蓮寺　黒野村

本尊地蔵尊。木佛長一尺二寸。日羅作。

當寺は、天台宗にして、由原山の本院たり。天正丙戌の兵火に罹りて今に至り堂宇存在す。」

とあるので、天台宗の寺であることは以前から知られていた。

挾間町誌には次のように書かれていて、山名が青雲山妙蓮寺となっている。宗派・本尊については天台宗・本尊地蔵菩薩は、雉城（ちじょう）雑誌と同じである。しかし、雉城雑誌で山名が「慶雲山」となっているのに現在では青雲山となっている。これは寺の廃寺と再興を繰り返す中で、変わって来たのであろう。現在は廃寺となっており、地区の人々の力で、プレハブの建物が建てられ、以前の寺の本尊や仏具など、その外この寺の歴史を語る多くの品物が置かれている。

平成十年に挾間「陣屋の村歴史民俗資料館」が「挾間町の文化財集」を作成する目的で調査に入ったとき、寺の多くの貴重な仏具と共に驚くような貴重な文書が発見された。これらの品物は小野三郎氏が、寺の貴重な品物が紛失して、寺の歴史までもわからなくなることを憂えて、紛失を防がれたおかげで貴重な資料は一部ではあるが保存されたのでありがたい手立てであった。

特に貴重な珍しい文書として、「陰陽師免許状」「陰陽師の掟文書」があり、陰陽師の使ったと思われる「諸道具」のあることが分かった。そのほかに、「涅槃図」、また寺の境内には、「別石六地蔵」「庚申塔」「古井戸」など多くの資料・遺跡を見ることができた。

一度は挾間町文化財資料集で紹介したが、今回はこれまで分かったことのまとめと新しくわかったこと、さらに、陰陽師の暮らし方のわかるところを明らかにしてみたいと考えた。

一、陰陽道の歴史と陰陽五行説

陰陽道の実態が少しわかりにくいので、「日本歴史大百科事典」の説明を借りると、陰陽道は中国で起こった思想である。これが日本に伝わって特殊な占法をもって四季のめぐりや方位などを基に国家・社会あるいは人の行為行動に関し吉凶禍福を判定する方術を言う。その中心となる思想は陰陽五行説で日月や十干十二支の運行配当を考え、そこから吉凶の判断を導き、そのために時日方位に関し日常茶飯事にも煩雑な禁忌を設けてさまざまな祭り祓い作法を行う。

継体天皇の時代百済から五経博士が我が国に派遣されたのは、陰陽道を思わせるわが国最古の記録である。以後百済より交代に学者が来朝して指導に当たった。が、推古天皇十（六〇二）年百済僧観（かん）勒（ろく）は歴本及び天文地理書・遁甲方術の書を献じたので書生三、四人

を選んでこれを学ばしめた。

聖徳太子は冠位十二階や十七条の憲法の制定発布に、また国史編纂に陰陽五行説を利用した。大化の改新に初めて大化の元号を建て、以来祥瑞改元を実施し、天智天皇は漏刻を創設したが、天智天皇は天文遁甲の術を良くし、陰陽寮を置き占星台を興した。このようにして陰陽道は、次第に僧侶の手から離れ、律令官制の中で地位を確立し陰陽寮として中務省の一機関となった。この頃の陰陽道の人としては、大津首・津守通・御王仲文・大津大浦などが知られている。

平安時代に入ると藤原氏は政権掌握に伴い、禁忌の乱用による天皇及び公家の拘束を図る一方、祥瑞改元を排して災異改元に変え天皇一代の改元を頻繁にして宮廷政治を形骸化した。

第一期　平安時代の初期は、律令時代の陰陽道がなお続いていた。

第二期　仁明朝より宇多朝までで、藤原氏の進出にともない陰陽的禁忌が重視され、祥瑞改元は陽成朝で終わり、以後はもっぱら災異改元に移行した。即ち宮廷陰陽道への変転期で春苑玉成、滋岳川人・藤原並藤・弓削是雄などの優れた陰陽師が輩出し、一般の造詣の深い者も輩出された。

第三期　後醍醐朝より後三条朝までで、この時期宮廷陰陽道の確立にともない賀茂・安倍両氏の支配体制が出来上がり天皇公家は物忌・方違の禁忌に毎日を送るようになった。賀茂保憲は陰陽頭となったのみならず、その子光栄及びその弟子安倍清明という二人の非凡な後継者が出たため光栄には暦道、清明には天文道を伝えこれから陰陽道は賀茂・安倍両家に分掌される基を開いた。清明の子吉平は安倍氏として初めて陰陽頭についた。賀茂氏は光栄の孫道言よりその子孫が相次いで頭となった。

第四期　白河朝より後鳥羽朝までは、ますます煩雑な禁忌作法が加わり、迷信化が極度に高められた。この時期政局の動揺が激しくなると不安な世相に自己の将来を予測しようとして陰陽道にすがる公家や知識階層が多く、専門家も多く現れた。その中で泰親は安倍氏として珍しく頭に任じられた。しかし、政変の中、陰陽寮は大治二年（一一二七）、治承元年（一一七七）とつづいて火災に罹り、重要な器物を失って衰退に向かいつつあった。鎌倉時代には、武家では建築造作などに実用的な面で陰陽道を取り入れ、ほとんどこれには安倍氏が当たった。

この頃陰陽道の祭りには次のようなものがあった。

気鬼祭・泰山府君祭・属星祭・土公祭・天曹地府祭・四角四境祭・雷公祭・三万六千祭など多くの祭りがあった。

〔追加資料〕平安時代の陰陽師の使命

1、怪異を読む、物忌と怪異・怪異の諸相・物忌の諸相（軽き物忌の時は、門を開く、重き物忌の時は、すべて門を閉じる。）怪異がどのようなものであるかを、陰陽師が「式占」と呼ばれる占いによって決めていた。これは非常に論理的な卜占で、歳・月・日・時刻・から計算式を使って結論を出す。十干十二支も使う。これによって六十の組み合わせを作り数学的操作をすることで結論を導き出す。

2、禁忌を告げる、・日時の禁忌（凶日・佛門日を知らせる、）・

病気の治療・病気の予防・天災回避・家内安全・方角の禁忌（方違（かたたが）え、乾（北西）の方角に行こうとしたところその日はその方角は「方塞がり」となっていた方塞がりではその方角に禁忌があることを意味したので、方角を変えた。）

「天一神」

3、災厄を除く

4、病気の治療

5、病気の予防

6、生命を狙う

7、天災の回避、四角四堺祭・疫病流行防止の予防・旱魃解消・家内安全

8、生命を狙う呪詛、菅原道真の件、陰陽師官人が呪詛をしたが効果はなし。

三、安倍清明と土御門家

陰陽道の長い歴史の中で、安倍清明は、その前に栄えていた加茂氏を圧倒して繁栄し超能力者として、神秘化された。安倍清明の先祖は、奈良朝の初めに右大臣、祖父は益材は大膳太夫で、父は彼の才能を生かし、天文博士、大膳太夫、穀倉院別当・播磨守を歴任し従四位下までのぼった。京都には土御門通りがあるほどの大きな建物と格式のある家であった。寛和二年（九八六年六月二十三日）早朝、花山天皇が寵愛の女御の死にあって悲嘆にくれていたとき　懐仁親王（一条天皇）への譲位が行われるという転変があって譲位をいち早く察知した。それを元に参内して奏上した。これによって彼の先見性が認められた。それでこの時から天皇家とかかわるようになった。

陰陽寮の職掌（一）陰陽道関係一七名・（二）暦道関係十一名・天文道関係十一名・（四）漏刻関係二十二名が官人として配置された。

○近世における陰陽道

戦国時代加茂家の正嫡は絶え、土御門（安倍）家は存続した。しかし、所領は失われ、貴重な書類典籍財宝は散逸してしまった。その上、秀吉の怒りにふれ、若狭へと都落ちせざるを得なくなった。この時期古代以来の陰陽道の伝統は終止符を打った。しかし、一六〇〇（慶長五）年徳川家康に呼び出され近世の宮廷陰陽道を再開した。

陰陽道は、安倍、加茂両家の復興が大切であった。土御門家にとっては、「天曹地府祭」を行うことが重要であると考えていた。

では「天曹地府祭」とはどのような行事であろうか。江戸期の天皇の一代一度施行された行事である。明正天皇から仁孝天皇までの十二通の記録と後陽成天皇の慶長六年正月晦日方凶謝祭都状その他が残っており、皇室にかかわる行事を行っている。陰陽師の権威を持つには、皇室の行事にかかわることが大切としたのである。それが「天曹地府祭」である。この「天曹地府祭」の目的は天の上帝の庇護を受け、天子陰陽里の機能が円満に四海安全、百姓康楽ならんことを祈ったもので、江戸時代多くの場合、即位より一年以内に梅小路の土御門邸内で執行された。神々のうち天曹は天の官曹（役所）の事である。したがって、天の役所に祭りを通してお願いをし

たのである。

祭儀内容の中でしきりに行われる酒水・加持・薫香・打盤は仏教から来たもの、印像・点府の加持も密教的色彩が濃い、拍手、奉幣中臣祓いだけは神道の形式をとり、法螺を吹くのは修験の要素が混じっている。

慶長五年若狭から京都へ帰ったとき、元の配下はばらばらであったが、摂津、河内等より、前土御門家に仕えていたものが集まって久脩を助けまとまった。その後、久脩は、織田信長の弟民部の娘をめとり、長男泰重を家の女房の腹に次男泰吉をもうけた。泰吉は倉橋家を継いだ。江戸時代には、将軍吉宗も天文・暦学に関心が深く西洋暦法に基づく改暦を企画し、土御門家のものとともに改善にかかった。これ以後も暦に関する役柄を続けた。

清明社の神祭り

土御門家では宝暦四（一七五四）年享和四（一八〇四）年、嘉永六（一八五三）年清明御霊社においてそれぞれ三七日間の神祭りを行った。清明社の旧地は倭州安倍山・摂州東成郡安倍野村・若州名田庄・泉州信田京屋町一条などに昔からの土地があってそこに様々な供物が献上された。並べられた供物は次の通り、霊符神像図・加藤清正奉納鈴・楠木正成奉納神鏡・万里小路信房筆跡・剣璽渡御記・冷泉為氏筆跡・三社神像図などがかざられていた。この供物からこの陰陽道が何を信じていこうとしているのかが分かる気がする。

方違（かたちがい）神社の信仰　「方違宮仮縁起」の中の禁忌項目

・禁忌の方角に向かって舎宅を建ててはならない。建てたときには、急ぎ此の神社に参り社の埴土をうけてその土をその身やその家に納めれば、その災害を免れる。あるいは境内の埴土を持ち帰り、あめを作り禁忌の宅地に納めれば邪気をけすことができる。その由来として、神武天皇が昔天香山の埴土をとらせて、瓦などを作らせて丹生川上に天神地祇を祭り、うた川の朝原においてかわらを以てみずなし天下平定がなる。

住吉神社では、神事として祭りの前夜大和国畝傍山の社の埴土を三つまみ半取って帰り取り粉として住吉社の土でもちをつくり行事のとき神前に供える行事。

・庚申信仰　一六八二（天和二）年ごろ青面金剛に七色菓子・洗い米・酒御灯火を供えて勧行したことから崇拝対象となった。

正月の十五日に啜るようになっていた小豆粥を延命のため、庚申の夜まで続けるようになった。京都の青蓮院門跡では、見猿、言わ猿、聞か猿の三猿を祭り庚申日の参詣者易者の繁栄が多かったのでこれを祭るようなった。挾間地方でも庚申祭りはあったように聞くが、その多くが床の間に庚申像の掛け軸や猿田彦の文字の掛け軸を飾っていたと聞くが、除災の願いであったように聞く。このような行事に、陰陽道が関係していたのであろうかと疑問に思う。おそらく庚申行事を実施していた人たちは、陰陽道との関係は意識していなかったと思う。挾間でよく言われているのは、天のさんしの虫が六十日に一度下界に下ってきて何か悪いことをしている人間はいないかを観察して天に報告するので報告をされないように夜通し起きていて番をしたと言われている。易者の繁栄、江戸時代の易者は、

家を構え、そこに祭壇を作って祝詞を上げて魔除けを進めるもの、辻において机を置き大きな人の図を置いて、占いを行う者などがあった。

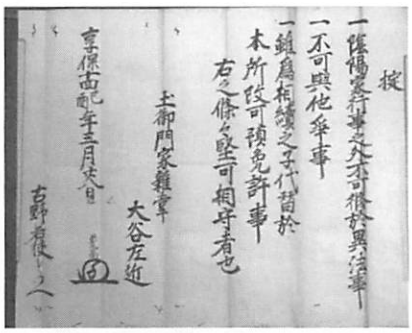
人体図の外の道具としては、竹串の下に文字を書いて、その竹に呪文を唱えながらその中の一本を取り出して、信者の困窮の解決法を語るのである。こうなると、古代の陰陽寮の頃の陰陽師とは全く違った仕事となり下俗したといわざるをえない。しかし庶民には、身近のものとなった。

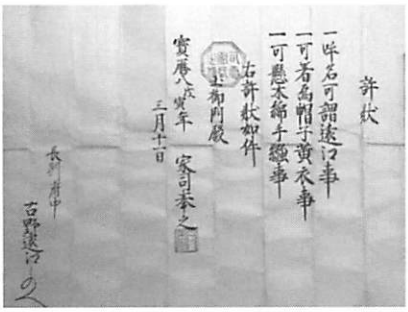
明治維新と共に宮廷陰陽道は解体し、暦法は太陽暦にあらたまったが、民間の易道は生き続けた。しかし、公には、明治の初めに陰陽道は禁止された。さらに陰陽寮は、一八九〇（明治二三）年に廃止された。

現在でも陰陽道は人々の考え方の中に或いは多くの慣習として、陰陽道のおこなった行事が多く残っている。

五、妙蓮寺陰陽師の免許状

【資料】





【資料1】

（口語訳）　掟（おきて）

一陰陽師の行事の外修すに於いては異法の事

一他の争いごと興すべからず

一子代替えのため相続於いてと雖も本所改め免許預くべき事

右の条々堅く相守るべきこと

土御門家雑掌

大谷左近

享保十四巳酉年五月二十八日　花押

古野若狭とのへ

【資料2】

許　状

一呼び名は遠江と謂うべき事

一烏帽子黄衣を着すべき事

一木綿のたすきを懸けるべき事

右許し状如件

印

土御門殿

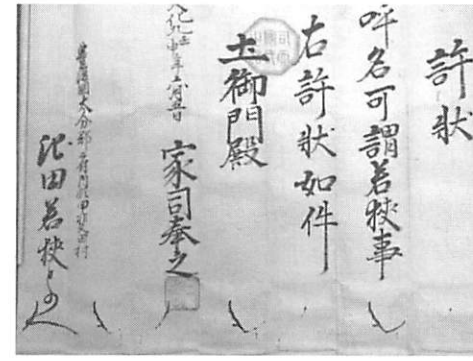
宝暦八戊寅　家司これを奉る　印

三月十一日

長州府中

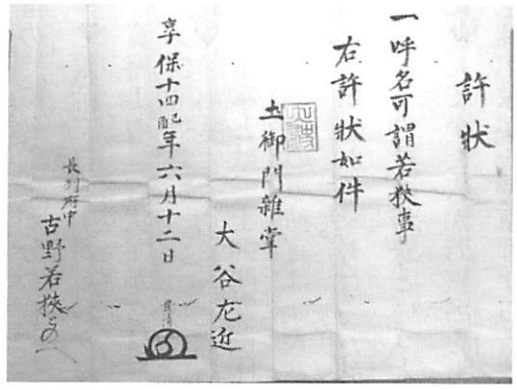
古野遠江とのへ

【資料2】



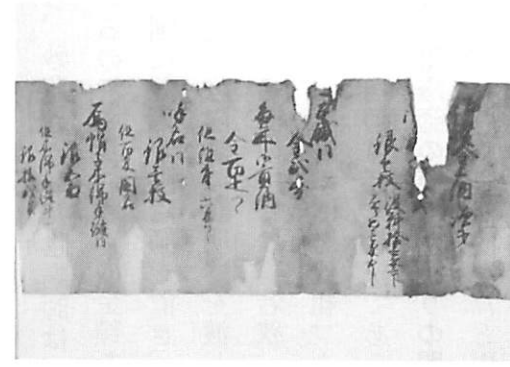
許　状
呼名可謂若狭事
右許状如件
土御門殿
文化壬申六月五日　家司奉之
豊後国府内領甲斐田村
池田若狭　とのへ

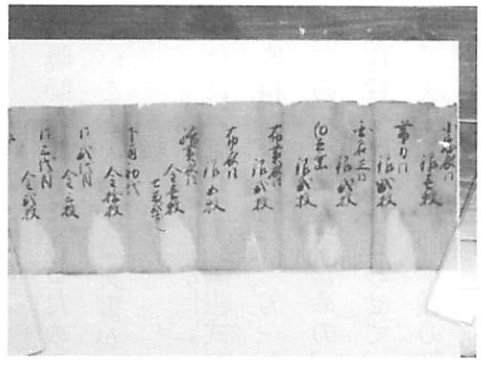
【資料3】



許　状
一呼名可謂若狭事
右許状如件
土御門雑掌
大谷左近
享保十四己酉年六月十二日
長州府中
古野若狭とのへ

【資料4】





御禮金上納次第
御支配入御禮式
銀壱枚　役料拾壱匁壱分
本職同　金弐分
毎年御貢納　百疋
但
呼名同　銀壱枚
但百匁　国名
烏帽子たすきハ
銀五枚
但　木綿たすき斗ハ
銀拾弐匁

妙蓮寺の陰陽師の免許状の発行元はいずれも「土御門家」によるものであることが分かる。

陰陽師文書の中からわかる事柄がたくさん見つかる。

資料1の「許状」からは、一として、呼び名を若狭というべき事。としている。またこの許し状を発行したのは、「土御門雑掌」である。雑掌とは、土御門家に仕えてその事務をするいわば事務官の事である。その事務官は『大谷左近』である。免許状を受けたのは享保十四年である。もらったのは、「長州府中　古野若狭とのへ」とあるので古野の若狭という人がもらったのであるが、古野は、古野に住んでいた人が若狭名をもらったのではないのだろうか。若狭は、土御門家が一時京都から若狭に追われたことがあるのでその時に因んでつけたものであろう。陰陽師の名前に「若狭」という「国名」をもらうには、別に高い金子を払わなければならないので、格の高い陰陽師と言える。

「資料1」の掟には、

親が陰陽師で、子どもも陰陽師になろうとする時、代替の時と雖も本所に届けるべきだと書いてある。親が陰陽師であったからと言ってそのまま陰陽師になるのではなく、届をしなさいと指示している。おそらく、免許状の金子の事もあるからであろう。

「掟」にあるように陰陽師は、頭に烏帽子をかぶり、黄色い着物を着なければならない。また他の行事をしてはならない。これが土御門家の掟である。さらに金子を納めなければ免状は受けられない。妙蓮寺には納入する金額の一覧の文書が残っていた。古い文書で判読しにくかったが次のようなことがかかれていた。

陰陽師の配下に入るためには、いろいろな経費を納めなければならないことのわかる文書がある。それが「御禮金上納次第」である。

初めに「御支配人御禮式」の文字があり、次に「銀壱枚」その下に「役料拾壱匁壱分一匁一分・懸り物壱匁五分」とある。これは土御門家の組織に入るための、費用銀壱枚のほか、役料・懸り物などの事務費や雑費が合わせて、銀弐匁六分がさらに必要という意味である。次に「陰陽師本職の証明のため金弐分」とあり、これを納めると「職札」が交付される。さらに土御門の支配下に入ると「毎年御貢納・金百疋」を納めなければならない。

また、陰陽師の「呼び名は、銀壱枚、但し国名は百匁」とあるから、妙蓮寺にいた陰陽師は、「遠江・若狭」などの国名をもらっているのでさらに多くの金額を要求されている。江戸時代土御門家は全国に数万の陰陽師を置き、諸国に陰陽師家触れ頭や取締役を置き、職札（陰陽師の証明）を渡し、毎年運上金を差し出させていた。陰陽師の名前の中では、若狭・遠江・河内・摂津などの土御門家に由緒ある陰陽師は「歴代組」と呼ばれ、特別扱いされていた。古野にいた陰陽師遠江・若狭であるから陰陽師の上級者であろう。

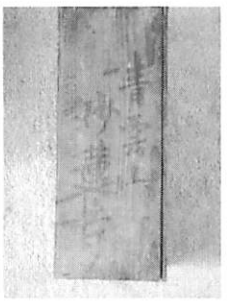
五、陰陽師の使った祈りの器物

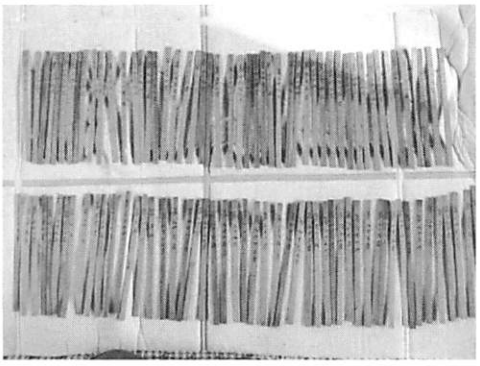
1、おみくじに使ったと思われる竹串（以前は存在したが、平成二十九年には見つからなかった。）

2、サイコロのような器具・これを並べる板（平成二十九年の調

査では見つからなかった。）

3、御籤箱　（箱の大きさは、底が十二㎝四方、高さ三十㎝）





地蔵尊
この裏には、維時　明治二十九年
とある。

青雲山
妙蓮寺
御籤箱の竹串　九十六本

箱の中には、竹串が全部で九十六本入っており、箱の下部には、一本ずつの竹串がやっと出せるくらいの穴が開いていて、箱を振ると「ザラ、ザラ」と音がして一本ずつでてくるようになっている。呪文を唱えながら、一本のくじ棒を示して、説いたのである。

易の道具のように占いに使ったのであろう。

竹串には、一本一本に、第一番　大吉とか吉、凶が全部書かれている。大吉も凶も吉の竹も全部同じ数であった。

時代が下がってくると、陰陽師の仕事は、公の仕事はなくなり、個人の病気平癒や祈祷などが多かったのではないかと考えられる。

陰陽師の仕事とは違うが、三十年ぐらい前に聞いた話には、次のようなことがあった、

1、病気平癒・成長期願・延命祈願
2、除災・除災の予防
3、家内安全・幸福の招来
4、家の建築時の方角・除災
5、精神的安定・怨霊・怨念の除去

六、一般に聞く、除災・祓い・病気平癒などとの関係は

・各種の手法が伝えられているが「陰陽道総説」に伝えられている「方位神社の事」大阪堺市に鎮座する「方違神社（かたちがい）」その神社にお参りするだけで、災いを除くことができる。それでもできないときは、祝詞を上げてもらう。またその境内の土を持ち帰って家の庭に撒く。

・病気になった時参り所に行くと、巫女が祝詞を上げて占ってくれる。

・家の棟上げには、祝詞を上げたり、餅を撒いたり、お酒を撒いたりして、「役除き」気持ちを落ち着けようとしたり、神仏に願ったりするような行事は欠かせない。

・家の造りで丑寅の方角に、〇〇があってはいけない。

・便所を壊すときには、人形を入れて壊す。
・西日の差す家は、考えて建てよ。

七、占いに行った事例（三十年ぐらい前）

・病気の原因を占ってもらおうとたずねたところ、その人の下着を持ってきなさいと言われた。呪文を唱えたあと「この人は、割と長生きをするが、この人の主人の方が病気になる。」と言われた。本当にその人の主人はすぐになくなった。
・娘が結婚できないと参り所に見てもらいに行ったところ。「清潔な山に行って、だれも見てないところで土をとり持ち帰って家のまわりにまくといい縁に恵まれる。」といわれた。実際に実行したがこれは効果がなかった。
・近所の人が、皆がねしずまった夜中に川に、しびんのようなものに尿を入れて毎晩流していた。これを近所の人が気づくことになって「夜中にあんなことをするのは気持ち悪いからやめてください。川の水もきれいでないといけないので。」と言われた。その人は腎臓が悪く、参り所に行ったところ、夜中に人目につかないように流すように言われたらしい。

こうなってくると何が陰陽道の流れをくむものか。仏教的除災術なのか。また「祓い」と言われるのか。判断が難しくなる。

八、終わりに

古代中国や韓国から伝わってきた、陰陽道はかなり理論的であり、天体や気候・暦・漏刻による時間の算出・暦（太陰暦）・「将来の予見」等を真摯に研究し説得してきたのではないか、特に天皇家と関係を持ちその病気の治癒にあたって病気を治癒したことは人々の信頼を大きく勝ち取った。しかし、時代が進むにつれ、科学が進むと、自然科学の進歩により、自然科学の方が自然の動きの真理を正確につかめるようになると段々陰陽道や祓い・祈祷の信用が薄れていったのではないかと思われる。

しかし、平安時代のような陰陽道とは全く違うのであるが、現代社会でも「陰陽的要素・陰陽師の考え方」が全くなくなってはいなくて、伝統的行事の中に生き続けているのである。縁起をかつぐ又は、そうした方が一層安全であろう、無難であろうと考えて、祓い等の祭りを実施しているところが多いのかと思われる。勿論、ぜひこの祭りをしなければならないと考えている多くの人々もいる。正月の飾りや建築棟上げなどには、「こうするのが本当だという儀式、祭りがたくさんある。あえてこれを止めるような人は少ないように思う。

この陰陽道にかかわる陰陽寮は、明治二三年まで存在しその時期に廃止された。大分県の中には陰陽師の居住したという記録はない。国東に一か所文書があるが、妙蓮寺とは格差があるように思われる。その根拠の一つは、妙蓮寺が、柞原神社とかかわりがあったことが大きいと考えている。疑問に残る言葉に「本院たり」・「金蔵院」という言葉であるが、今後の研究課題としたい。

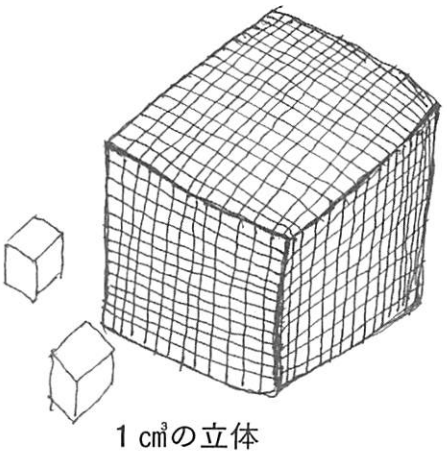
〔参考文献〕

1、「日本陰陽道史総　」村山修一、塙書房

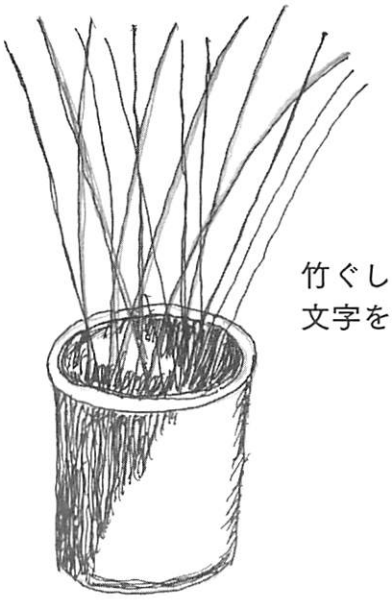
2、「陰陽師」　安倍清明と蘆屋道満　繁田信一著　中公新書
3、「陰陽道」　呪術と鬼神の世界　鈴木一馨著　講談社
4、「安倍清明」　陰陽師たちの平安時代　繁田信一　歴史文化ライブラリー吉川弘文館
5、「世界大百科事典第2版」の解説
6、日本大百科全書
7、「現代陰陽師入門」・陰陽道北斗派・第三第宗家・高橋圭也
8、「陰陽師」安倍清明の末裔たち　荒俣　宏　集英社

※占いに使ったと思われる。使用方法は不明。
こんな物が前（20年前）あった。

立方体の集り（箱に入っていた）



1㎤の立体



竹ぐしに
文字を書いた物